

冷夏

律佳

「暑中お見舞い申し上げます。」

涼しげに泳ぐ金魚の絵はがきの中、少し右上がりの癖のある文字が泳いでいた。

「礼佳」

畳に寝転がって本を読んでいた幼なじみは、何?と言うように顔を上げた。

線の細い印象を与える色白の肌と端正な顔立ち。

子供の頃から見慣れて居ても時々ドキッとする色香を放つのは、紛れもなく男で俺の幼なじみの礼佳。

ゆるく着た浴衣の胸元から白い肌が見える。

「そーいやお前さ、暑中見舞いに名前書いてなかったぞ」

俺の言葉に、礼佳はそうだったっけ?と言う顔をする。

「でも、僕からだって涼は判ったんだろう?」

それなら良いじゃないか。と言外に含む。

それはそうだが。

暑中見舞いなんて風流な物を送って来る知り合いは礼佳しか居ないが、それでも差出人位は描いてくれたって良いじゃないか。

礼佳は再び本に視線を落とした。

リン...と透き通った音を、風鈴が響かせる。

頬を撫でる風に俺は目を伏せた。

「あー、いいなあ、こっちは涼しいし、水も旨いし」

「当たり前だよ」

棘のある礼佳の声に、俺は礼佳を見る。

「僕はなんで涼があんな所に行くのかわからないよ。

暑いし、人は多いし、空気も水も不味いし、街は汚い。」

突き刺すような視線と声音に俺は礼佳から目をそらした。

東京は東京で楽しいんだけどなあ。

俺は小さく息をついた。

礼佳はそんな俺を鋭い目で睨む。

「そんな毛嫌しなくたっていいだろ」

「毛嫌じゃない。

僕はあんなに汚い空気を吸っていたら生きていけないよ」

その言葉があながち嘘ではないため、俺は返す言葉に詰る。

礼佳は隣の市の大学に進学していたが、入学してすぐの初夏に昔から良くなかった肺の調子が悪くなって休学を余儀なくされていた。

もう二年になる。

直接聞いてはいないが、この様子だとこのまま退学するのだろう。

その大学も、体調を理由に実家に近い所を選んだのに。

俺なんかよりずっと頭が良いだけに勿体無い話だ。

不意に、ゴトッと少し建てつけの悪い音を立てて襖が開く。

「…なんだ。涼じゃん」

背後から降ってきた声は礼佳の弟。律佳ものだ。

「おう。律も久しぶり。元気にやってんのか？」

振り返ると、律佳は少々怪訝そうに俺を見る。

「あ、ああ。

兄貴に会いに来たのか？」

「？？

なにいってんだよ。当たり前じゃないか」

俺と礼佳が幼なじみ兼親友なのは、律佳も良く知ってるはずだ。

礼佳は無言で弟を一瞥すると、本に視線を落とす。

礼佳と律佳は喧嘩でもしているのだろうか。

礼佳と律佳は顔を合わせても会話をしない兄弟ではない。

俺のしるかぎり普通の、仲の良い兄弟だったはずだ。

まあ、兄弟の事は俺が口出す事でも無いし、と俺は特に気にしない事にした。

「…まあ、ゆっくりしてけよ」

妙な表情で俺を見て、律佳は襖を閉めた。

カラーンと小さな音を立てて、麦茶のコップの氷が崩れた。

爺さん

「涼は、いつまで此方に居るんだ？」
帰りがけに思い出したように礼佳が言う。
「んー、バイトもあるし明後日には帰るつもり」
俺の返事に、礼佳は少し淋しそうに表情を曇らせた。
「…そうか。
じゃあ、明日はバタバタして忘れそうだから、爺さんに線香でも上げてってくれ」
「ああ」
俺たちは仏壇のある部屋に足を向けた。
礼佳の祖父は、もの静かで寡黙な人だった。
だからといって冷たい訳ではなく、俺にも礼佳にも同じ様に接してくれた。
父も祖父も居ない俺にとっては本当の祖父の様な存在だった。
「早えな。
じっちゃん居なくなつてもう三年も経ったのか」
真夏だというのに妙に寒い1日だったのを覚えている。
ここは山奥の田舎で、真夏でも都会の様に連日真夏日にはならないが、それでも夏だというのに20°Cを下回る寒い日だった。
「…そうだな。
来週の金曜日か」
静かな礼佳の声を聞きながら、俺は線香をあげ、目を閉じた。
目を開けた一瞬。

俺の瞳には妙な物が写った。
爺さんの遺影の左隣に、礼佳の写真があったように見えた。
位牌も…二つだった。
…何だ、今のは。

「…う。涼？どうしたんだ？ぼーっとして」
聴こえてきた確かな礼佳の声に俺は我に帰った。
「なんでもない」
礼佳の遺影が見えたなんて縁起でも無いこと言えるかっ
縁起でもない。
だけど、一瞬とはいえた余りにもクッキリと見えたその映像は頭から離れてはくれなかった。

夏妃

翌日は朝から肌寒く、ずっとシトシト雨が降っていた。

俺はというと、昨日見た幻覚が気になっていた。

礼佳が死ぬなんてありえない。

療養は長引いて居るけど、でも…。

「あら、あんた今日は家に居るのね」

リビングのソファーでごろごろとしていると、姉の声が降ってきた。

「悪いかよ」

「別にそんなこといってないじゃない」

と夏紀は一旦言葉を切って、少し低い声音で言った。

「…あんた、毎日礼佳君の家に行ってたの？」

「おう」

「私が言うことでも無いんだろうけど、そう毎日行くのは辞めなさい」

「はあ？ どういう意味だよ」

夏紀は怪訝そうに俺を見る。

こういう反応…、ああ律佳だ。

律佳も妙な顔をして俺を見たっけ。

「会えなくて辛いのは、あんただけじゃ無いのよ」

なんだよ…。へんな言い方しやがって。

憤然とした顔で、俺は夏紀の背中を見送った。

今の言い方じゃ、まるで皆が礼佳に会えないみたいじゃないか。

まるで、もう何処にも居ないような…。

昨日の幻覚が頭にフラッシュバックしてくる。

俺は家を飛び出して礼佳の家に走った。

息を切らして、インターホンを鳴らして。

ドア越しに礼佳のおばさんの声が聞こえる。

名乗ると玄関を開けてくれた。

「そんなに急いでどうしたの、涼くん。」

少し淋しそうに笑っておばさんは言った。

「おばさん、礼佳は？」

息も絶え絶えに尋ねると、その表情は更に曇る。

「会いにきてくれたのね、ありがとう」

俺を見上げて淋しそうに笑って、おばさんは俺を中に促した。

礼佳を呼ぶ事なく、玄関の近くの仏間の扉に手をかける。

ああ、そうだった。

俺の中で、ゆっくりと記憶が戻ってきた。

礼佳

あれは、一昨年の初夏。

夜中にバイトが終わって携帯を見ると、夏紀から着信とメールが着ていた。

礼佳が、倒れて入院したと。

夏休みになつたらすぐに帰る、と約束した俺の元に、病院の礼佳から暑中見舞いが届いた矢先。

律佳から電話が来た。

礼佳が、死んだ、と。

俺は、無言で仏壇の前に座った。

おばさんは、席をはずして、俺と礼佳の二人だけになった。

「…よう。

今日は、ちゃんとしてるな」

振り返ると、戸口に律佳が居た。

涙がとまらなかった。

ジリジリと鳴く蝉の声が響く。

ゆらゆらと地面から立ち上る陽炎に、また夏が來た事を知る。

家の郵便受けを開けると、不要なマンションやピザの広告に紛れて一枚のハガキが入っていた。

「暑中お見舞い申しあげます」

和紙のハガキに描かれた、大輪の花火の中で、癖のある文字が舞っていた。

差出人は無い。

ああ、礼佳だ。

今年も、田舎に戻つたら礼佳と部屋でのんびりしよう。

俺はそう思つて、葉書を鞄にいれた。